

1. 以下の文章は、労働と生産に関する講義内容を概括したものである。文章中の空欄 ①から⑤ に適合する用語を、次の語群から選び、回答欄に記入せよ。

語群

意志 → 意識 / エネルギー / 過程 / 環境 / 機械 / 協業 / 共有 / 技術 / 繰り返し / 計量 / 結果 / 原材料 / コピー / コンテンツ / コントロール / 再生産 / 自動 / 手段 / 消費 / 身体 / 熟練 / 生活 / 生産 / 対象 / 大量生産 / 知覚 / 知識 / 抽象 / 手作業 / 手順 / データ / 伝達 / 統合 / トリミング / 道具 / 動力 / 廃棄物 / 発見 / 評価 / 分業 / 分配 / プログラミング / 補填 / 本能 / メディア / 目的 / モノ / 有用 / 欲求 / 利用 / 労働力

労働とは、人間を他の多くの動物から区別する **目的** **意識** 的活動のことである。人間は活動するまえに (1) まず **目的** を設定し、(2) 次に、それを **意識** しながら、活動を継続することができる。(1) を「構想」(2) を「遂行」とよべば、「構想と遂行の分離」が人間の労働の最大の特徴である。

この分離を基礎に人間の労働は、外部から直接の刺激がなくても **目的** に向かって一定期間、持続する **過程**、すなわち労働 **過程** のかたちをとる。この **過程** は、さらに何段階かの下位の **過程** に分けられ、それらの諸 **過程** は最終 **目的** に合わせて整合的に組み立てられる。一般に仕事の「段取り」とよばれている作業である。

構想と遂行は、単純に「分離」するだけではすまない。ただ A と B と C … といった作業をバラバラにやればよいというのではない。ある作業の結果を前提に、次の作業は可能になる。最終 **目的** を実現するためには、何からはじめて、次になにをやるか、といった **手順** が決定的な意味をもつ。A と B と C … をどのような順にこなしてゆくのかを考えなくてはならない。構想には、単に最終 **目的** をきめることだけではなく、実現のための **手順** を整えることも含まれているのである。

細分化された **過程** は、それぞれ固有の **目的** をもっている。糸を紡ぐ **過程** は、布を織る **過程** と連鎖しているが、糸と布という異なるオブジェクトをもつ。労働の遂行に必須なのは、直接の **目的** が糸や布のような、だれが見ても混同されることのない明確なかたちで設定されることである。労働の **目的** は、自分ひとりの頭のなかで考えているときよりも、それを他人に **伝達** しようとするすることで、より明確なかたちをとる。これもまた人間に特有な、言語による優れた **伝達** 能力が、明確な **目的** 設定の基礎なる。他人が設定した **目的** を自分の **目的** として遂行できる能力によって、人間の労働は他の動物にはみられない広範な社会性をもつのである。

**目的** と対をなす語は **手段** である。人間が自分の意志で直接 **コントロール** できるのは、手足などの自己の **身体** である。しかし、人間の労働の特徴は、たとえば石で石を割って石器をつくったり、木片を燃やして米を炊いたりするように、**身体** 以外のさまざまなモノを媒介にして、対象となるモノに変化を生じさせる能力にある。自然現象として、石どうしがぶつかって割れたり、自然発火の山火事で木片が燃えたりすることはあるが、人間はこうした現象を意図的に引き起こすことができる。この場合、割るのにつかった石や燃やした木片などが、**目的** を実現するための労働 **手段** の原型である。

労働 **手段** は、一定の **目的** に向けて合理的に組み立てられた体系をなす。このような労働 **手段** は、目で見たり音を聞き分けたりする **知覚** 能力と、手足や口舌など随意に運動させることができる器官を通じて **コントロール** される。労働 **手段** は、たとえば金槌の柄とヘッドのように、(A) **身体** で直接操作する部分と (B) モノがモノに作用する部分に大別される。どの労働 **手段** も実物をみればそれぞれ個性があり、(A) と (B) は複雑に関連しているので、どれが (A) でどれが (B) か、部品レベルで分けられるわけではない。しかしオブジェクトとして **抽象** 化すれば、どの労働 **手段** も (A) と (B) をプロパティと

してもち、「切斷する」「加熱する」等々のメソッドも定義できるクラスのインスタンスなのである。

労働 **手段** は、(A)の属性をもつため、それを思い通りに使いこなすには、多かれ少なかれ一定の **熟練** を要する。釘を打つには、金槌を打ち込む角度や力加減にある程度慣れなければできないし、木片を燃やすのにも着火や火加減の調整にある程度の経験を必要とする。(A)の側面が複雑で大きければ、必要な **熟練** の度合いもそれだけ高まる。この要素が強い労働 **手段** を **道具** とよぶとすると、その対をなす **機械** は、逆に (B) の側面が支配的な労働 **手段** ということになる。

(A)での人間の関与はあるにせよ、(B)におけるモノどうしの作用・反応それ自体は、人間の意志とは関係なく進む。石は割れるべくして割れ、木片は燃えるべくして燃える。ここでは物理学や化学が明らかにする自然法則が支配しているのであり、それを無視していくら「割れる」「燃える」と念じても無駄である。**機械** は、モノどうしを意図的にアレンジすることで、自然現象としては通常起こらない状況が、「それ自身で」繰り返し再現するように組織化した労働 **手段** である。**道具** に対して **機械** を特徴づけるのは、この「それ自身で」という **自動** 性にある。どの労働 **手段** も (A) と (B) の二つの属性をもっており、そのため個々の具体的な労働 **手段** を指して、どれが **道具** か **機械** かを言い当てることはむずかしい。しかし、糸車と紡績機を並べてみればどちらを **道具** とよび **機械** とよぶのが適切かはだれにでもわかる。

イギリスは19世紀に、**機械** をつかった大量生産システムによって、インド製の優れた **熟練** ベースの綿織物を凌駕し世界市場を制覇した。綿工業で繁栄したマンチェスターが「世界の工場」とよばれたのはこの時代のことである。イギリスにおける資本主義の確立は、労働 **過程** の革新の一つの基盤としていたのである。しかし、イギリスの資本主義は、資本主義の一つのタイプはあったが、唯一のタイプではなかった。19世紀末から20世紀にかけて、ドイツを典型とする新しいタイプの資本主義が登場した。日本の資本主義もこの後発型資本主義の一類型だった。その産業基盤となったのは、新たに発展した重化学工業だった。イギリス綿工業の技術革新が、紡績・織布などの繊維産業における人間の手作業の **機械** 化を中心にするものだったのに対して、製鉄工場や化学プラントでは近代科学の応用が重要な役割を果たした。自然科学の発展は、自然界では発生しない諸現象を人工的に発生させ、大規模な装置のなかで **コントロール** することを可能にした。巨大な溶鉱炉や反応装置の内部では、モノとモノの反応が自然法則にしたがって進む。ここでは労働による **コントロール** も、計器をにらみバルブをひねったり、目標に向かってハンドルを切るといった、より間接的な内容が変わってゆく。その点でこれらの労働は外見上、手作業の **機械** 化と大きく異なってみえる。しかし、労働 **手段** の二面性に立ち戻って **抽象** 化すれば、いずれにおても (B) の側面が比重を高めたことに変わりはない。

資本主義のもとで生産力が上昇する過程は同時にまた、一方で労働 **手段** の (B) の側面が拡大され、布にせよ鉄にせよ、一般に素材生産における **自動** 化を大きく進展させ、労働人口をそこから押し出しながら、他方で大量生産される素材を最終消費につなげる組立型の長い加工系列を新たにうみだすかたちで、労働人口の中心を下流に向けてシフトさせてきた。そして現在でも、このようなシフトは基調として変わることなく続いているが、ただそれと並行して、20世紀末からは、新しい労働 **手段** が加工系列そのもののすがたを大きく変貌させつつある。コンピュータの登場である。人間の目と手先にたよる単純な組立作業は早くから、単一作業を高速に繰り返す産業用ロボットによって置き換えられていったが、配管工や溶接工のような状況によって **手順** を整える **熟練** を要する作業でもコンピュータは強力な威力を発揮するようになった。コンピュータも労働 **手段** として **抽象** 化すれば、金槌の柄とヘッドと同じように、(A) **身体** で直接操作する部分と (B) モノどうしが作用する部分とに大別される。つまり (A) **道具** としての性格と (B) **機械** としての性格をもつ。職種として一定の「型」を与えられるような **熟練** は、基本的にはだれでもトレーニングを受ければマスターできる共通の諸要素で構成され、状況に応じておこなうべき **手順** はあら

かじめきまっている。ただそれが複雑なため、人間が「知覚」し判断する「熟練」の領域に委ねられてきたのである。コンピュータはこの領域の、少なくとも一部を「自動」化する道を拓いた。ふりかえてみると、人間が手でおこなっていた諸作業を分解し労働「手段」の内部に移し「自動」化するには長い年月を要した。紡績機で糸が切れたり纏れたりしたときに、特定の紡錘の回転をとめ、纏れを解き糸をつなぐといった人間だったらすぐにできる単純作業でも、それを「機械」に埋め込まなくてはオートメーションは完成しない。それがほぼ一巡した現段階で、今度は人間の「知覚」や判断をコンピュータの内部に移し「自動」化しようとするれば、それにはやはり相当な時間を要するであろう。

今日のコンピュータはこの意味ではまだ「道具」としての性格が強く、広い意味での「プログラミング」を人間がおこなう必要がある。表計算やワープロの操作でも、人間が何をしたいのかを自ら分析し、順番に操作する必要がある。「プログラミング」の基本をなすのは「手順」なのである。その後コンピュータははじめて、人間には考えられない高速で大量の処理をこなす構造になっている。電磁気的信号という高速なモノの反応を労働「手段」として活かすには、人間の直接的なはたらきかけがまだまだ不可欠な「道具」性の強い労働「手段」の段階に、現在のコンピュータはとどまっている。

ただ「プログラミング」に用いるエディターがプログラマーのミスをチェックし入力を補完したり、デバッガーがエラー箇所を突きとめることまではできる。そしてこうした側面での発達も、たしかに絶えることなく漸進している。しかしそれでも、不完全に「プログラミング」されたコードが自らエラーを検出し補正して動きだしたり、より効率的なアルゴリズムで自分自身を書き換えてゆくような段階には至っていない。現段階ではこれらはプログラムの「暴走」でしかない。とはいえ、人間の「手の労働」だけではなく、「頭の労働」の領域においても、コンピュータという新しい労働「手段」が登場したことは画期的な意味をもつ。コンピュータによって「熟練」を伴う人間労働が一挙に消えてなくなるわけではないが、それが労働のあり方を根本から変えはじめていることはたしかである。そしてこの変化は、資本主義を次の発展段階に移行させる潜在力を宿しているのである。